

〔センター行事〕

## 第30回リハ並木祭を終えて

リハ並木祭実行委員会事務局

去る10月17日（土）、並木の葉も色づき始め、秋らしく過ごしやすい天気にも恵まれ、国立障害者リハビリテーションセンターと国立職業リハビリテーションセンターにおいて、第30回リハ並木祭を開催いたしました。今回も多くの方をお迎えすることができました。

一般公開の前日である16日（金）は、開会式と内覧会を行いました。昨年に引き続き利用者が開会式の司会を務め、利用者実行委員による爽やかな開会宣言で開会されました。恒例のテーマ及びポスターの表彰では、テーマ75点、ポスター15点のご応募をいただいた中から実行委員会での選考も難航しましたが、テーマ部門は『並木の向こう 新しい未来へ』が最優秀作品として選出されました。ポスター部門では、新しい日々に希望があることを表現した朝日の中に、リハビリテーションの象徴としての樹木と、中心には人間をモチーフした「30」の数字が描かれた作品が最優秀作品として選出されました。ポスターの作者から「センターの人々が毎日希望に満ち、それを目指し30年間努力していったこと、そして未来へ繋げていくことを象徴しています。」とのコメントをいただきました。

一般公開の17日（土）は、例年通り、訓練紹介、クラブ紹介、グルメストリートにおける模擬店、講堂での企画、地域団体からの企画参加等があり、賑やかに並木祭を彩りました。特別企画の東京サロンオーケストラ恒例コンサートでは、「生オケ」と「指揮」の利用者共演や、来場者全員で「崖の上のポニョ」を合唱する等、盛り上がりを見せました。この外、講堂企画では毎年恒例の軽音楽部並木祭ライブや、ハワイアンバンド、ウクレレ演奏が行われ、

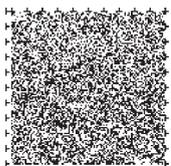
大盛況でした。また、第一体育館ではツインバスケットボール紹介、車いすバスケットボールチーム紹介、ウィルチェアーラグビー紹介が行われ、OBを含め、多くの方が見学されていました。

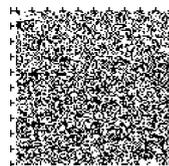
今年は30回目の並木祭実施となりました。実行委員の利用者の方を始め、多くの利用者みなさんが、積極的に企画の参加をしていただいたおかげで盛り上げることができたのだと思います。また、地域の当事者団体等の参加もあり、日々の活動についての報告や、交流・情報交換の場となり、「地域とのつながり」を深めることができました。さらには、外部の方々に広くセンターを知っていただく機会や、修了生同士の旧交を温める場にもなったのではないかと思います。

並木祭の運営にご尽力いただいたセンター内外の多くの方々、並木祭を楽しみに来場して下さった地域の方々にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。また、今後とも温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。



正面入口を飾る看板





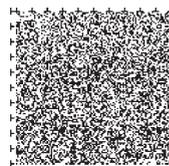
賑わうグルメストリート

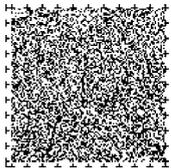


開会式で表彰されるテーマ最優秀者



ツインバスケットボールデモ試合





〔センター行事〕

## 第2回職員研修会開催報告

管理部総務課

第2回職員研修会が、去る9月11日（金）本館4階大会議室で開催され、約100人の職員が聴講しました。

今回の職員研修会は、埼玉県立大学学長の佐藤進先生をお招きし、「福祉と医療の連携を考える」をテーマにご講演を頂きました。

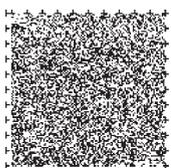
佐藤先生は、はじめに埼玉県立大学の建学の理念を紹介し、障害者等のサービス利用者へのチームアプローチを基本にする教育方針について述べられ、次に我が国の障害者福祉の変遷に触れつつ、「障害」の概念が国連や我が国でどのように変化し、「医学モデル」から「社会モデル」への転換が進んでいるかについての説明をされました。

また、これまでのご自身の施設現場の経験から、医療と福祉は互いの専門性を強調するあまり利用者不在を招きかねず利用者主体の思想が後退していること指摘し、施設でできることは地域で再現できるはずであり、そうしたことに取り組めない「専門性」は専門家の独りよがりすぎないと述べられ、今後、めざすべきは「良い施設」ではなく、「良い地域社

会」であろうとのお話がありました。さらに、地域社会が障害者の生活を支える場に変容するためには解決すべき数多くの問題があることを訴えられました。

佐藤先生には、福祉現場の豊富な体験のもとにお話をいただき、これから当センターが事業を実施していくうえで、専門性とは何であるか、専門性を利用者のためにどのように活かしていくことが重要か、新たためて考える貴重な機会をいただきました。

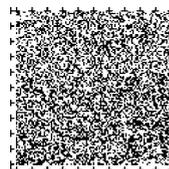
佐藤先生にはご多忙の中、ご講演を頂き感謝申し上げますとともに益々のご活躍を祈念しまして、職員研修会の報告とします。



〔国際協力情報〕

# JICA ミャンマー社会福祉行政官 育成プロジェクト短期専門家派遣報告

学院 手話通訳学科教官 小藺江 聡



2009年9月21日から10月4日の2週間、JICA主催の「ミャンマー社会福祉行政官育成（ろう者の社会参加促進）プロジェクト」の短期専門家としてミャンマーを訪問した。ヤンゴンを経由し、研修先のマンダレーに向かった。ミャンマーは昭和30年～40年代の高度経済成長期以前の日本にどことなく似ていた。昔、日本で走っていたバスを街で見かけ、驚きとともに懐かしさを覚えた。また、昨年訪れたマレーシアとも宗教面での違いはあるものの、やはりよく似た面を持つ国であった。

さて、このプロジェクトはろう者の専門家による手話教師の育成が主な目的である。今年の3月には、ミャンマーのろう者が来日し、当学院でも研修を受けている。出発前にJICA側の担当者である小川美都子氏（彼女は当手話通訳学科の卒業生（14期生）であり、世界的に活躍する姿を教官として喜ばしく感じた）と打合せを行い、日本での研修の成果を踏まえて、さらに専門的な知識と技能を習得させるためのカリキュラムを用意した。

しかしながら、現地での研修が始まり、実際に手話指導の模擬授業を行ってみると、手話教師にとって不可欠なインタラクション（手話教師と学習者の自発的で自然なやりとり）の技術が十分でなく、またその重要性についても理解できていないことが明らかになった。その基盤となるスピーチの能力もきわめて不十分であり、予定したカリキュラムを一部変更せざるをえなかった。受講者に5分程度のスピーチを課し、それをティーチャートーク（学習者向けの話し方）のレベルまで高めるなど、スピーチやインタラクションの技術の向上を目的としたトレーニングを追加した。

今回の研修では、可能な限りミャンマー手話で指導することを目指した。来日時の研修では、通訳を介して日本手話で指導したが、やはり受講者の母語によって指導するのが理想である。昨年マレーシア

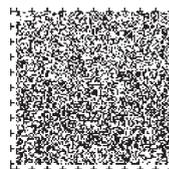
でも同様の研修を行い、可能な限りマレー手話で指導したが、受講者の母語による指導が効果的であることを実感した。そこで、マンダレーに到着するまでの間に、同行した小川氏や、2日間滞在したヤンゴンろう学校の児童達からミャンマー手話を必死に学んだ。もちろん十分とはいえないが、ミャンマー手話で指導をすることによって、効果的な指導ができてだけでなく、現地のろう者との絆も深まったと思う。

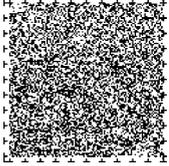
マンダレーでの研修を終え、ヤンゴンに戻ってJICAへの報告を行った。その際、日本大使館の鈴鹿参事官が出席され、研修について説明させていただく機会を得た。参事官は本プログラムに大いに関心を示され、手話教育のみならず、手話言語に関するさまざまな質問をいただいた。

2週間の研修を通して、受講者は手話教育に関する専門的な知識や技能の重要性に対する理解を深め、意欲的に学習に取り組んだ。私自身もまた、指導者として自分自身を見つめなおすよい機会となった。さらに、本学科では毎年「ダスキントリーダーシップ研修」として海外のろう者を受け入れているが、当学科として、このような国際交流を今まで以上に充実させていきたいと考えている。

また、このプロジェクトに関わり、アジア諸国では手話教育がまだまだ整備されていないことを痛感した。今後も、このようなプロジェクトに積極的に参加し、海外支援に携わっていききたいと思うと同時に、海外支援ができるような日本のろう者の育成にも携わっていききたいと思う。

最後に、同僚をはじめ皆様からのご支援・ご協力のおかげでこうしてミャンマーでの活動を終えることができたことを心より感謝申し上げたい。

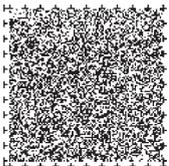




授業の様子



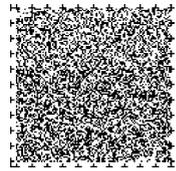
受講者との写真



〔更生訓練所情報〕

## 就労支援セミナーの開催報告

就労移行支援課就労相談室



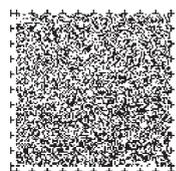
秋の就職面接会シーズンを目前に控えた平成21年9月24日、本館大会議室において就労移行支援利用者を対象に就労支援セミナーを開催いたしました。このセミナーでは、障害者雇用を行っている企業の人事担当者やすでに就労されている修了者などを講師にお招きして、就労に向けて身につけておくべきことや障害者の就業の現状などについてご講演をいただいております。こうした機会を通じて、利用者の方々には就労に向けたイメージを具体化していただき、就労への意欲を一層高めていただくことを目的としております。

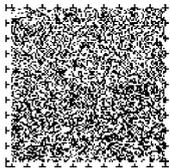
今回は、所沢市内に本社を置く協栄流通株式会社の障害者雇用担当増田あけみ様と平成19年に当センターの就労移行支援を修了された山口真之様にご講演をお願いいたしました。セミナーには、就労移行支援利用者のほか、自立訓練利用者、職員を含め60名近い参加者がありました。

小松原就労移行支援課長によるセミナー開催の挨拶後、はじめに協栄流通株式会社の増田様からご講演をいただきました。協栄流通株式会社は、都民生協（当時）の物流関連会社として1982年に設立されました。現在は、コープネットグループの会社として、従業員数約2,500名の企業となっております。増田様からは、会社の概要についてご説明をいただいた後、障害者雇用の取り組みについてのお話をいただきました。協栄流通株式会社では、現在知的障害の方を中心に78名の障害者を雇用されています。あわせて障害者雇用担当者を3名配置し担当者チームによる支援体制を整え、障害者雇用に積極的に取り組んでこられています。協栄流通株式会社では、障害のある方も雇用したからには職場の重要な戦力（働き手）であると考え、適材適所の配置をすすめながら給与面も含め特別扱いをしないという方針を貫いておられます。但し、物流倉庫という環境での就労となるため、安全面の確保という観点から採用

の判断を行う場合があるとのことのお話もいただきました。その上で、企業として期待する人材像について、「自立」「謙虚」「協調」という3つのキーワードを挙げていただき、実際の事例を紹介していただきながらこれらの重要性について強調してお話をいただきました。そして、これらのキーワードが意図することが、実は会社が一丸となってめざす安心で安全な品質管理につながるということをよく理解することができました。

つづいて、修了者の山口様からご講演をいただきました。山口様は、当センター修了後株式会社ヤオコーに採用となり、主として商品の陳列や補充等の業務に携わっておられます。職場の上司や同僚の方々にも恵まれ、現在では特別支援学校からの実習生の指導も依頼されるなど、職場ではなくてはならない一員となっております。山口様は、不慮の事故による受傷後、身体の回復を待って仕事探しを始められましたが、一見したところ障害は見られないためすぐに採用になるものの、年齢相応に次々と仕事を任されては仕事が覚えられず身体もついていけなくなり退職に至るということを何度か経験されました。そして、気がつけば何十回も転職を繰り返しておられたとのこと。その頃は、周りと比較して不甲斐ない自分を責めたり、時には家族に当たることもあったと伺いました。その後、色々と相談をされる中で当センターを紹介され、そこで初めて高次脳機能障害という診断を受けられました。仕事がうまくいかなかったのは、怠けているからではなく高次脳機能障害による症状が原因であったということを知ることとなりました。さらに更生訓練所で就労に向けた支援を受けられたことを機に、「障害を隠すのではなくオープンに伝えて、障害を理解してくれる会社に就職しよう」と考えるようになったとのことでした。就職面接会においても、その考え





方で面接に臨まれ採用になったところが現在の会社であったと話して下さいました。

後半は、協栄流通株式会社障害者雇用担当の滝澤泰子様、服部久子様にも加わっていただき、質疑応答の時間を設けさせていただきました。当初どの程度質問が出るか心配をしておりましたが、そのような心配をよそに利用者の方々からは「採用後の研修は?」「就職面接でのポイントは?」「仕事をしていて良かったと思うことは?」などの質問が次々と寄せられ、採用者側、当事者側それぞれの立場から丁寧にわかりやすく回答をいただきました。

セミナー終了後に行ったアンケート結果では、「就職のために身につけておくこと」「企業が求めていること」「面接の受け方（受ける上での考え方）」

などが今後の就職活動を行う上で役立つという回答が多く寄せられました。

企業の採用担当者や実際に就労している修了者の話を聞く機会を通して、それぞれの利用者の皆様には、就労に向けた課題を見いだすきっかけになったものと期待いたしております。今後もこうしたセミナーを定期的で開催しながら、就労に向けた支援をすすめてまいりたいと考えております。

最後に、お忙しい中快く講師をお引き受けいただいた協栄流通株式会社の増田様をはじめ滝澤様、服部様、当センター修了者の山口様に、御礼申し上げます。

